

國學院大學學術情報リポジトリ

陸奥金華山の近世石造物

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 尾上, 周平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001928

陸奥金華山の近世石造物

尾上周平

1 前近代の金華山をめぐる諸問題

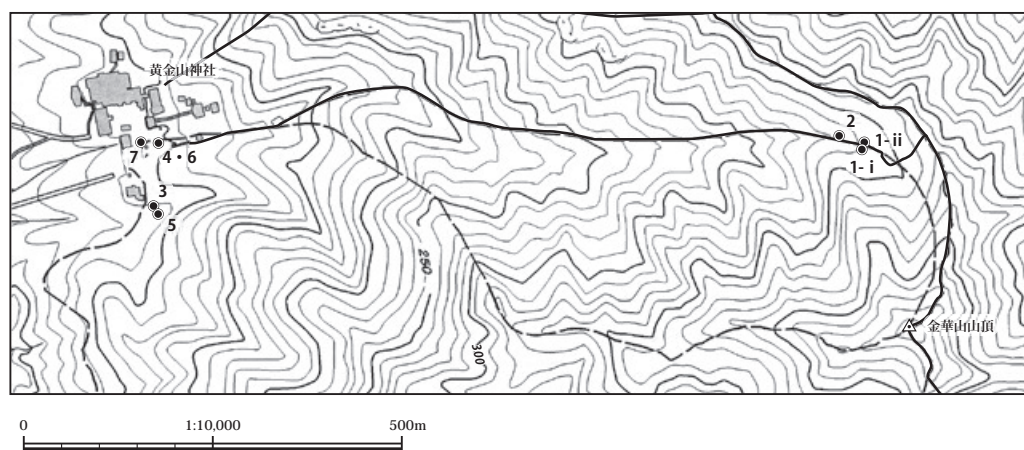
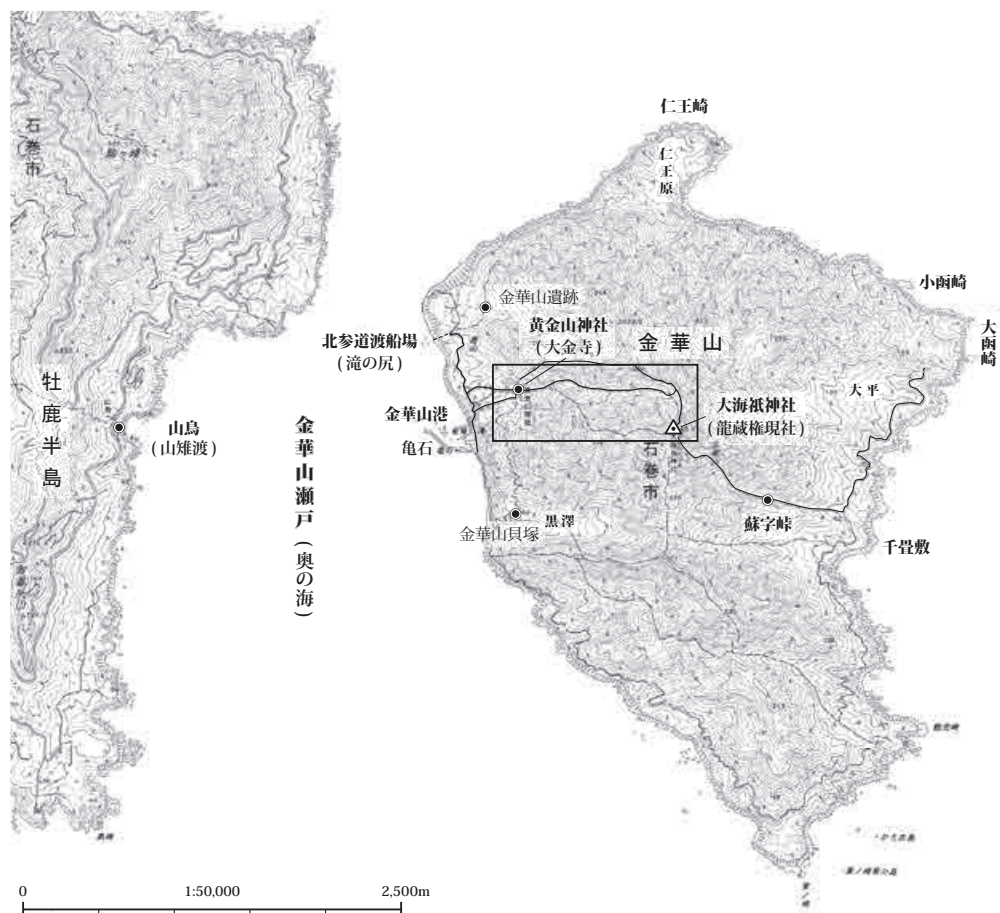
宮城県石巻市、牡鹿半島沖に所在する金華山には、黄金山神社が鎮座し、多数の参詣者が訪れている。前近代の金華山は、別当大金寺を中心とした神仏習合の霊場であり、近世においては、各地で金華山講が結成され、弁財天信仰に基づいた金華山詣が活況を呈したことが知られる。しかしながら、前近代の金華山に関する具体的な歴史像については、未だ不明な点が多く、重層的な信仰内容を組み立てている要素についても、明確には整理されていない現状にある。

本学学術資料センターでは、平成25(2013)年度から継続して、「陸奥金華山と石巻・女川の震災復興に学ぶ」スタディーツアーを実施しており、併行して金華山信仰に関する調査研究を重ねてきた。すでに、絵図類等の比較検討を通して、近世から近代にかけての信仰空間の変容を辿り、明治維新に伴う神仏分離が金華山信仰における画期となることを示したが(尾上2016)、近世の間に大きな変化を見出すまでには至らなかった。とはいえ、金華山信仰の信仰圏がいかなる範囲に及ぶかは不明ではあるにせよ、近世の金華山は、遙か江戸から参詣者を集めるまでの求心力を備えるに至った。文禄年間の成蔵坊長俊による「中興」を経て、近世中期以降における金華山詣の盛況へと、金華山信仰が活発化していく過程を概観すれば、近世の金華山において信仰空間の整備が大きく進められたことは想像に難くない。金華山信仰の歴史的展開を考察するうえで、近世もまた欠くことのできない重要な画期として提示し得ると言えよう。

本稿は、斯様な観点から、近世の金華山信仰の実像を明らかにしていくことを目指すものであるが、度重なる火災・自然災害の被害や、明治維新の神仏分離による影響のために、当該期の様子を物語る史資料は限定されている。拙稿(前掲)では、道中記や絵図類を対象資料としてアプローチを試みたが、今回は金華山に所在する近世石造物を紹介し、金華山信仰の近世史を素描するために必要なピースを増やすこととしたい。

2 金華山の近世石造物

『牡鹿町誌』下巻によれば、金華山に所在する石造物は、近世・近代含めて総数40基である(牡鹿町誌編さん委員会編2002)。これは、牡鹿町(現石巻市)による、昭和57(1982)年度の石造文化財調査における集計であるが、石造物の簡略な分類と基数を示したのみで、個々の資料における具体的な情報は、一部を除いてほとんどの資料について提示されていない。そこで、まず本章では、本学の調査で点検・確認した石造物のうち、近世の作と考えられる8点について、その基礎的情報を示すこととする(第1



第1図 金華山の近世石造物分布図 (国土地理院 25,000分の1地形図を改変)

～6図・第1表)。石造物は、外形上の特徴から像類・標類・塔類に大別し、各節ごとに記述した。なお、石燈籠については割愛した¹⁾。

(1) 像類

本節では、仏像等の像容を丸彫り・浮彫りした像類を示す。尊格順に従って、両部大日2軀（金剛界・胎藏界大日如来坐像各1軀）、金剛界大日如来坐像1軀、地蔵菩薩坐像1軀、八臂弁財天坐像1軀を報告する。なお、『牡鹿町誌』では、ほかに「不動尊」3軀が数えられるが（牡鹿町誌編さん委員会編2002）、調査で確認することは叶わなかった。

両部大日（1-i・1-ii） 黄金山神社から山頂に至るまでの登山道上、大金寺旧地の伝承を持つ標高約340mの平坦地に、水神社に隣接して所在する。登山道の両脇に、金胎一對の大日如来坐像が配置されている。

胎藏界大日如来坐像（1-ii）は、像・蓮台・角台石の部位からなり、いずれも安山岩製である。地中に半ば埋没した2段の花崗岩製基台に乗る。像は、法界定印を結び結跏趺坐した姿を表した丸彫像である。背面まで衣文の表現が施される。蓮台は一部破損している。角台石正面に刻まれた銘文から、文久3（1863）年に奉納されたことがわかるが、奉納者の名は摩耗してほとんど判読できない。

金剛界大日如来坐像（1-i）は、1-iiの部位構成とほぼ一致するが、蓮台下の角台石を欠く。地中に半ば埋没した2段の花崗岩製基台に乗る。1-iiの頭高と揃うように設えられている。像は、智拳印を結び結跏趺坐した姿を表した丸彫像である。像・蓮台のいずれにも銘文は施されない。

『新版 金華山詣文章』（燕石斎薄墨1825）などの道中記や、『陸奥東海金華山正面図』をはじめとする絵図²⁾には、参詣箇所のひとつとして、「両部大日」が記されている。文久年間より前に発行された絵図にも「両部大日」として像の描写が見られることから（第6図）、現在配置されている両部大日像は、あるいは文久3年に造替された像である可能性が指摘される。なお、管見の限りでは、文政年間になるまで「両部大日」の記述は確認できない。

金剛界大日如来坐像（2） 両部大日を目前に臨む登山道脇には、弘法大師坐禅石の伝承を持つ大石が露出している。この石上には、礫積みとともに、金剛界大日如来坐像（2）が乗せられている。像と蓮台が一体の安山岩で作られる。像は、智拳印を結び結跏趺坐した姿を表した丸彫像である。頭部を欠損しており、蓮台も摩耗が激しいが、僅かに蓮弁の表現の痕跡を留めている。造作はいたって簡素で、両部大日像と異なり、衣文の表現は背面には施されない。銘文は認められない。後世に坐禅石上に置かれたことが明白ではあるが、ともすると、現存する両部大日像の先代の可能性も指摘できようか。

地蔵菩薩坐像（3）（第2図） 金華山港から表参道を登りきった位置、宅地背後に流れる沢沿いに、権大僧都宥雄菩提碑（後掲5）と隣接して所在する。像・蓮台・角台石からなり、いずれも花崗岩製である。2点の花崗岩製角台石を横に並べた基台の上に乗る。像は、合掌し結跏趺坐する地蔵菩薩を表した丸彫像である。背面まで衣文の表現が施される。角台石の正面・両側面には銘文が刻まれており、寛政4（1792）年の紀年銘がある。現在は子安地蔵の名称で知られ、子宝・安産の篤い信仰を集めている。ただし、銘文によれば、元来は、筑前唐泊浦所属の宮市丸の乗組員である十五郎なる人物によって、先祖供養や海上交通の安全を祈念して、各地の海運要衝地に奉納されたうちの1軀であったことがわかる³⁾。筑前唐泊浦は五カ浦廻船の拠点の一港であり、日本各地への舟運を担っていた。

なお、『新版 金華山詣文章』(燕石齋薄墨1825)には「地蔵」が、『陸奥東海金華山正面図』などの絵図²⁾には、「石地蔵」が、それぞれ亀島からの参道(現在の表参道に相当)を登りきった位置に描かれており(第6図)、立地が概ね一致することから、これら絵図に描かれた「地蔵」は、この3に比定できる可能性がある。

八臂弁財天坐像(4) 境内の舞殿横に、八大龍王碑(後掲6)とともに所在している。傍らに建てられた由緒書きには、かつて境内に祀られていたところを、昭和58(1983)年に八大龍王碑と併せて移築したとある。安山岩製の像と花崗岩製の台石からなる。像は、舟形光背の正面に、蓮台の上に結跏趺坐する八臂の像容を陽刻した浮彫像である。摩耗が著しいため定かではないが、おそらく頭頂に宇賀神を冠し、蛇の表現が見られることから弁財天像と判断される。印や持物も摩耗のため特定困難である。

現在の黄金山神社では、昭和9(1934)年筆の絵馬などにみられるように、二臂で琵琶を携えた弁財天像が専ら用いられるが、大金寺発行の弁財天曼荼羅では八臂の像容で描かれるほか(前掲拙稿第2図)、現在弁天堂に祀られている弁財天像や、伝金華山出開帳の弁財天像(石巻市寿福寺蔵)も八臂坐像であり、近世の金華山においては、八臂の像容で表現されることがほとんどであったと思われる。

(2) 標類

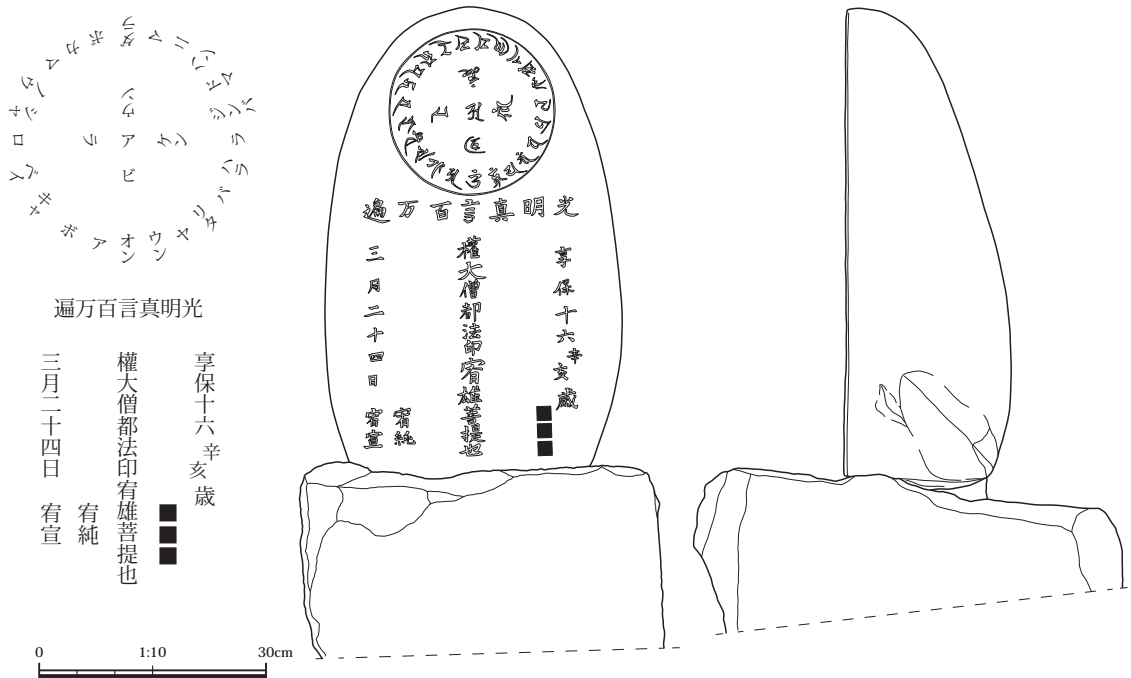
本節では、主に柱状・板状の外形をなす、いわゆる標類を示す。金華山における近世の標類は、いずれも幅が奥行よりも広く、板状の外形を呈する板石標に分類される。権大僧都宥雄菩提碑1基と八大龍王碑1基を報告する。

権大僧都宥雄菩提碑(5)(第3図) 宅地の背後を流れる沢沿いに、地蔵菩薩坐像(前掲3)と隣接して所在する。安山岩製の塔身と花崗岩製の角台石からなる。塔身は、頂部が円首の正面観をとる。正面のみを平滑に仕上げの一方で、側・背面は曲面であり、鑿痕も一部に留める。角台石は、稜や角が破損している。種子は、塔身の正面上部に刻んだ円の内縁に沿って下方から右回りに光明真言種子を配し、その中央に胎蔵界大日如來の真言を十字に刻んでいる⁴⁾。それらの下部に主銘文が刻まれる。主銘文によれば、5は、享保16(1731)年に、大金寺7代住職の宥雄の菩提を弔って、光明真言百万遍を誦した8代住職の宥純と宥宣によって造立されたと知ることができる。宥雄の示寂を享保10(1725)年とする記述(宮城縣史蹟名勝天然記念物調査會編1931)に従えば、宥雄逝去の6年後に造立されたことになり、宥雄の七回忌に伴って造立されたとも推測される。

八大龍王碑(6) 境内の舞殿横に、八臂弁財天坐像(前掲4)とともに所在している。昭和58(1983)年に、旧北参道船着場である「滝の尻」付近の砂浜に埋没しているところを発見され、現在の位置に移設された(牡鹿町誌編さん委員会編2002)。塔身と台石からなり、いずれも花崗岩製である。塔身は、高さ2mに迫る大形の自然石で、正面に「八大龍王神」と主銘文を大きく配する。『牡鹿町誌』には、嘉永5(1852)年の紀年銘を持つとあるが(牡鹿町誌編さん委員会編2002)、摩耗のためか確認できない。台石は、塔身を乗せるための凹みを除いて、加工痕がほとんど見られない。牡鹿町には、これを含めて八大龍王碑が12基あり、航海安全と大漁の神として、漁師や五十集商人の信仰を集めているという(牡鹿町誌編さん委員会編2002)。



第2図 地藏菩薩坐像(3) 実測図



第3図 権大僧都宥雄菩提碑(5) 実測図



1 両部大日（奥） 2 坐禅石（手前）

2 金剛界大日如来坐像



1 両部大日（右：1-i 左：1-ii）

1 両部大日と水神社



1-ii 胎藏界大日如来坐像(両部大日) 1-i 金剛界大日如来坐像(両部大日) 1-ii 蓮台・角台石（銘文）

第4図 金華山の近世石造物写真（1）



3 地藏菩薩坐像（左） 5 権大僧都宥雄菩提碑（右）



3 地藏菩薩坐像（子安地藏）



6 八大龍王碑（左） 4 八臂弁財天坐像（右）



5 権大僧都宥雄菩提碑



6 八大龍王碑



4 八臂弁財天坐像



7 無縫塔（開山上人脱履の跡碑）

第5図 金華山の近世石造物写真（2）

(3) 塔類

本節では、塔類について示すが、近世の所産と判断できるものは、無縫塔1基のみである。なお、『牡鹿町誌』では、文政12(1829)年の紀年銘を持つ「石造五重の宝塔」があるとしている(牡鹿町誌編さん委員会編2002)。随神門付近に所在する層塔を指すとも思われるが、定かではない。

無縫塔(7) 五十鈴神社が鎮座する小丘麓に所在する。塔身・台石・角台石からなり、いずれも花崗岩製である。塔身は、高さ1mに迫る大形の無縫塔であり、頭頂部は突起造出しを有し、肩部は側面から頭頂部にかけて緩やかな曲線を描く丸肩を呈する。背面には、幅5cmほどの深い鑿痕が1カ所残っている。正面に6字の種子を刻むが、表面の風化が進み判読困難である。台石・角台石は、いずれも地中に半ば埋没しているため、正確な形態・法量は定かではない。

第1表 金華山所在の近世石造物一覧

大別	番号	種別 部位	名称(通称)				紀年銘	銘文	備考
			石材	高	幅	厚			
像類	1-i	丸彫像	金剛界大日如来坐像(両部大日)						3点の角石(花崗岩)を並べた2段の基台に乗る。地上に置いた2点と蓮台の間に残りの1点を配し、1-iの頭高と揃うように設えられている。
		蓮台像	安山岩	17.5	49.0	38.0			
	1-ii	丸彫像	胎藏界大日如来坐像(両部大日)				【角台石】 文久3年 (1863年)	【角台石】 (正面) 奉納 文久三癸亥歳 七月■■■日 中城■■■ 小■■■■■ ※以下3行以上判読不可	3点の角石(花崗岩)を並べた2段の基台に乗る。
		角台石	安山岩	22.5	50.5	39.0			
		蓮台像	安山岩	19.0	58.5	46.5			
	2	丸彫像	金剛界大日如来坐像						坐禪石上に所在。原位置ではないと思われる。頭部欠損。
		蓮台像	安山岩	10.0	25.0	25.0			
	3	丸彫像	地蔵菩薩坐像(子安地藏)				【角台石】 寛政4年 (1792年)	【角台石】 (右側面) (正面) (左側面) 寛政四年壬子年 先祖代々 筑前唐泊浦一体 施主 三界萬靈 津軽青森一体 筑前國唐泊浦 海上安全 松前箱館一体 宮市丸 佐渡嶋小木濱一体 十五郎 志州的屋浦一体 仙臺金花山一体	現在は「子安地藏」と称される。2点の角石(花崗岩)を並べた基台に乗る。
		角台石	花崗岩	45.5	53.5	53.0			
		蓮台像	花崗岩	24.0	65.0	65.0			
4	浮彫像	八臂弁財天坐像						『牡鹿町誌』は八臂観音とするが、蛇の意匠が見られ、弁財天と判断される。	
	台石	花崗岩	26.0	60.0	48.0				
	塔身	安山岩	51.0	31.0	10.0				
標類	5	板石標	権大僧都有雄菩提碑				【塔身】 享保16年 (1731年)	【塔身】 (正面) 【種子】アピラウンケン/オンアボキヤベロシヤノウ マカボダラマニハンドマジンバラハラバリタヤウン 光明真言百万遍 享保十六辛亥歳 ■■■■■ 権大僧都法印有雄菩提也 有純 有宣 三月二十四日	大金寺7代住職の有雄は享保10(1725)年示寂とされ、七回忌の折に造立された供養碑か。
		角台石	花崗岩	28.0	46.0	51.0			
		塔身	安山岩	62.0	37.0	19.0			
	6	板石標	八大龍王碑				【塔身】 (正面) 八大龍王神	『牡鹿町誌』によると、嘉永5歳(1852)年の造立としているが、判読できなかった。昭和58(1983)年に、旧北参道船着場の「龍の尻」付近の砂浜で発見された。現在は境内へ移されている。	
		台石	花崗岩	36.5	124.5	54.5			
塔身	花崗岩	183.5	82.0	28.5					
塔類	7	無縫塔	無縫塔(開山上人脱履の跡碑)				【塔身】 (正面) ■■■■■■■		『牡鹿町誌』には、「開山上人脱履の跡碑」として載る。享保17(1732)年とするが、紀年銘は確認できなかった。銘文は判読困難だが、種子6字を配する。『宮城県史蹟・名勝・天然記念物』では大日如来の真言としている。
		角台石	花崗岩	35.0	94.0	(31.0)			
		台石	花崗岩	17.0	41.0	(22.0)			
		塔身	花崗岩	93.5	58.5	58.5			

凡例

1. 「大別」「種別」は、本稿で用いる分類である。詳細は本文各部冒頭を参照されたい。
2. 「番号」は、本稿内での通し番号である。
3. 「名称」は、像類については尊像と姿勢を記した。標類については主銘文を冠した名称を記した。塔類については石塔形式を記したものである。
4. 「通称」は、現在呼びならわされている名称を持つものについて、()内に記したものである。
5. 「部位」「石材」は、石造物1組における部位構成とその石材である。記載は下部にある部位から示した。
6. 「高」「幅」「厚」は、部位ごとの法量である。数値は各最大値で、単位はcmである。土中に埋没するなど、正確な計測ができなかった場合は、()内に見かけ上の数値を記した。
7. 「紀年銘」は、石造物1組における紀年銘である。干支及び月日は省いた。【】内は、紀年銘が列字される部位を示す。()内の西暦は和暦を単純に置き替えたものである。
8. 「銘文」は、石造物に刻まれた文字である。【】内は記載部位を、()内は記載箇所を示す。
9. 本表の項目ほか構成については、『立山信仰宗教村落一岩峠寺—石造物等調査報告書』(立山町教育委員会編2012)を参考にしている。

無縫塔は、一般的に僧侶の墓塔として用いられるが、大金寺の僧侶は、遷化しても金華山内の聖性を維持するためか島内には埋葬されず、対岸の山鳥（石巻市鮎川浜山鳥）に墓所が営まれた（月光1977）。よって、本資料が墓塔として造立された可能性は低い。昭和6（1931）年刊の『宮城県史蹟・名勝・天然記念物』には、表廻りの名所の一つとして、「無縫塔の梵文碑」・「脱履の跡碑」の名称で記載されている。これによれば、長俊の入定伝承地を示す意味合いを持って、昭和6年までには現在の位置に造立（ないしは移動）されたことや、銘文は大日如来の真言であったことが窺える⁵⁾（宮城県史蹟名勝天然記念物調査會編 1931）。『牡鹿町誌』も同様に「開山上人脱履の跡碑」と記載しており、さらに享保17（1732）年の紀年銘があるとするが（牡鹿町誌編さん委員会編 2002）、本学の調査では確認できていない。

なお、『新版 金華山詣文章』（燕石斎薄墨 1825）には「随求塔」が、『陸奥東海金華山正面図』などの絵図²⁾には「随求堂」が、太神宮（現在の五十鈴神社）の鎮座する小丘麓に、何らかの施設として描写されているが、本資料との対応関係は不明である。

3 金華山の近世石造物に関する小考

(1) 金華山における近世石造物の特徴

以上までに概観してきた金華山の近世石造物について、抽出し得た各情報を整理する。

造立位置 これらの石造物について、原位置を留めているか問題はありますが、現在の所在地は大きく3



第6図 『新版 金華山詣文章』 文政8（1825）年（燕石斎薄墨1825）

つに分かれる。すなわち、①表参道を登りきった境内への入り口脇に、地藏菩薩坐像（3）・権大僧都宥雄菩提碑（5）、②境内の五十鈴神社や舞殿近辺に、八臂弁財天坐像（4）・八大龍王碑（6）・無縫塔（7）、③登山道上の平坦地（標高約340m）に、両部大日（1）・金剛界大日如来坐像（2）が分布している（第1図）。これらのうち、近世の絵図において現在と概ね齟齬のない位置に描写がみられる石造物は、1・3である（第6図）。

また②のうち、4・6は、昭和58年に現在の位置に移設されたことが明らかとなっている。6は、本来北参道船着場の「滝の尻」付近に造立されていたと考えられ、かつて機能していた北参道における唯一の資料である。

③は、大金寺旧地の伝承地であるが、近世の大金寺は現在の黄金山神社社務所の付近に位置していたと考えられる。「中興」以前のかつては、本所に位置していた時期もあったのであろうか。ともあれ、ここに「両部」大日が配されている信仰的意味合いは定かではないが、谷筋を通過していた登拝道が、ちょうど山頂へと至る尾根筋に切り替わる8合目に位置しており、山頂を核とする聖界への入り口と見做されていた可能性も指摘できようか。

石材 これら石造物の石材は、専ら安山岩と花崗岩が用いられている。金華山の地質はほぼ全山が花崗岩で構成されており、安山岩は産出しない。いずれにせよ石材産地の同定をおこなっていないため、花崗岩製石造物が金華山の石材を用いたものかは不明だが、登山道上には鑿痕の残る花崗岩も散見されることから、一部の台石については、金華山産の花崗岩を用いた可能性もあろう。石材産地の検討については、近隣地域の石造物との比較も加えて、今後別稿にて論じることとしたい。

発願者 参詣者による奉納と、大金寺自身による造立とに分けられる。いずれか判明しているのは、前者が1・3、後者が5のみである。このうち、3については、海運に従事する人物によって、海上安全などを祈願して奉納されたことが判明した。奉納者の十五郎に関しては、銘文に記された5ヶ所の地藏菩薩坐像も含めて、なお研究の余地があろう。

5は、大金寺の僧侶らによって、大金寺7代住職宥雄の菩提を弔って造立された経緯によるため、他の石造物とは一線を画する性格を持つ。宥雄は、大金寺歴代住職のなかでも最も情報量の多い人物と言って差し支えなく、金華山所蔵棟札第5・6号⁶⁾に、「金華山辨財天堂一字再營」の事績が見え（宮城縣史蹟名勝天然記念物調査會編1931）、また「金華山住持比丘宥雄證識」の末文で終わる讚文をもつ弁財天曼荼羅も確認されている（尾上2016）。5が、大金寺時代の僧侶の名を記した現存唯一の石造物であることを勘案すると、金華山信仰の整備に功績のあった人物像が浮かび上がってくる。

信仰対象 仏像の像容や、銘文に刻まれる神仏号を整理すると、大日如来5点⁷⁾、地藏菩薩1点、弁財天1点、八大龍王1点となる。

『奥州金華山畧縁起』（近世、年次不明）には、「辨財天女ハ大日如来の垂迹西方極楽尔てハ阿彌陀如来ニ現し娑婆世界尔出てハ觀世音菩薩と現れ」と記されており、近世の金華山においては、弁財天と大日如来・阿弥陀如来・觀音菩薩を同一視する立場が取られていたようである。大日如来に関わる信仰物は、近世の大金寺が真言宗に属したとする説⁸⁾の脈絡の中で語られてきたが（宮田1969）、今後は、かかる金華山独自の解釈に基づいておこなわれた教線拡大に関する議論へと深化させる必要があるだろう。

八大龍王については、先述の通り、現在は航海安全と大漁の神として信仰されており（牡鹿町誌編さ

ん委員会編 2002)、海神としての性格も含んだ金華山信仰の側面を物語っている。

地藏菩薩については、3の銘文に刻まれた通り、先祖供養との関連による。同時に、海上安全の祈願も込められており、祖霊信仰・海神信仰などが複合した金華山信仰の重層性を伝える資料である。

このように、金華山信仰における重層性を形成する各要素は、個々の石造物に表現される神・仏格を通して分解することが可能である。発願者の性格と併せることで、信仰内容と信仰者層との関係も明らかにしていくことができるだろう。

(2) 残された課題

類例資料との比較 本稿で報告した年次不明資料の年代観はもとより、これらの資料をもとに考古学的な議論をするためには、近隣地域における類例資料との比較を行わなければならない。例えば、山鳥に所在する墓地には、100基ほどの金華山関係の墓碑があるが(牡鹿町誌編さん委員会編 1988)、この石造物群は、無縫塔をはじめとする金華山内の石造物の年代観を検討するうえで、有用な比較資料となるはずである。八大龍王碑は、牡鹿町域に所在する全ての八大龍王碑の脈絡において捉え直す必要があるだろう。これによって、大漁の期待をはじめとする、海神への現世利益的な信仰の側面について明らかにすることが望まれる。また、十五郎によって全国各地に奉納されたであろう地藏菩薩坐像は、従来物質資料に即して語られることの少なかった、海運従事者による信仰といった、新たな視点を提供してくれることであろう。

信仰圏 ほかにも、金華山信仰に伴う石造物として、参詣者・信仰者が居住した村落において造立された、いわゆる金華山供養碑や巳待供養塔を忘れてはならない。これら島外に造立される金華山信仰関連の石造物は、その分布域や年代的増減を明らかにすることで、信仰圏の範囲や拡大過程を把握することが期待できる。今後は、本節で挙げた課題を補うとともに、金華山の内外に示される石造物の動向を明らかにし、参詣者・宗教者の両面から、近世における金華山の実態解明を目指すこととしたい。

謝辞

現地調査に際しては、黄金山神社に幾度も足を運ばせていただき、格別のご厚意を賜った。改めて深謝申し上げますとともに、金華山の一刻も早い復興をお祈り申し上げます。また、AGIソフトのフォトスキャンを用いた本稿第2・3図の作成にあたっては、朝倉一貴氏にご協力をいただいた。末筆ながら御礼申し上げます。

註

- 1) 『牡鹿町誌』によると、金華山における石燈籠は計16基を数え、うち近世の所産は、享保17(1732)年、文化元(1804)年、文化6(1809)年、文政元(1818)年、文政10(1827)年、弘化3(1846)年、嘉永3(1850)年、嘉永5(1852)年があるという(牡鹿町誌編さん委員会編 2002)。
- 2) 大金寺刊、文政8(1825)年ほか。
- 3) 金華山以外では、筑前唐泊浦(宮浦湾、福岡県福岡市西区宮浦)、津軽青森(青森県青森市)、松前箱館(北海道函館市)、佐渡嶋小木濱(佐渡島小木海岸、佐渡市小木地区)、志州的屋浦(的矢湾、三重県志摩市・鳥羽)

- 市)に1軀ずつ奉納されたようである(第1表)。なお、筑前唐泊浦の1軀については、報身山願海寺(福岡県福岡市西区大字宮浦357)に近似する地藏菩薩坐像があり、ほかの4軀と併せて今後検討する必要がある。
- 4) いわゆる光明真言曼荼羅で、近世における光明真言関連石造物の標準的構図である(庚申懇話会編 1980)。
- 5) 「五十鈴神社の下に一基の無縫塔あり、大日如來の呪文を梵字に刻せり、傳へて中興開山上人脱履の跡なりと云ふ」とある(宮城縣史蹟名勝天然記念物調査會編1931)。種子は判読困難であるが、2字目と6字目の種子は、ビ・ウンとも読め、胎藏界大日如來の真言アピラウンケンに終字のウンを付したのものとも思われる。
- 6) 金華山所藏棟札第5号:宝永6(1709)年、同第6号:享保4(1719)年
- 7) 無縫塔7の種子を大日如來とする『宮城縣史蹟・名勝・天然記念物』(宮城縣史蹟名勝天然記念物調査會編 1931)に従う。
- 8) 大金寺が、近世にあつて仙台の竜宝寺末に連なり真言宗を宗旨としたことは、『牡鹿郡御萬改書上』や『封内風土記』をはじめとする数々の資料が示しているが(五来編 1983、田辺 1772)、日向の修験者である野田泉光院成亮が諸国の靈場を巡拝した際の記録、『日本九峰修行日記』など一部の資料には天台宗と記すものも見られ(野田1816)、近世を通じて真言宗に属したか判断するには、なお慎重を期する必要がある。

引用・参考文献

- 燕石斎薄墨 1825 『新版 金華山詣文章』 仙臺書林 裳華房
- 牡鹿町誌編さん委員会 編 1988 『牡鹿町誌』上巻 牡鹿町長 木村富士男
- 牡鹿町誌編さん委員会 編 2002 『牡鹿町誌』下巻 牡鹿町長 木村富士男
- 尾上周平 2016 「陸奥金華山の宗教空間 —近世・近代における絵図面等の比較検討を通して—」『國學院大學博物館研究報告』第32輯 國學院大學博物館・國學院大學學術資料センター、103-112頁
- 小野寺正人 1977 「金華山信仰の展開」『東北靈山と修験道』山岳宗教研究叢書7 名著出版、170-185頁
- 月光善弘 1977 「金華山の修験道」『東北靈山と修験道』山岳宗教研究叢書7 名著出版、158-169頁
- 庚申懇話会 編 1980 『日本石仏事典 第二版』 雄山閣出版株式会社
- 五来重 編 1983 「牡鹿郡萬御改書上」『修験道資料集 I 東日本編』山岳宗教研究叢書17 名著出版、36-41頁
- 立山町教育委員会 編 2012 『立山信仰宗教村落 —岩峠寺— 石造物等調査報告書』
- 田辺希文 編纂 1772 『封内風土記』卷13(鈴木武夫 1975 『復刻版仙臺叢書 封内風土記』第2巻 宝文堂、623-634頁所収)
- 野田成亮 1816 『日本九峰修行日記』(宮本常一ほか編 1969 『日本庶民生活史料集成』第2巻 三一書房所収)
- 宮城縣史蹟名勝天然記念物調査會 編 1931 『宮城縣史蹟・名勝・天然記念物』第六輯(復刻版:宮城縣史蹟名勝天然記念物調査會編 1982 『宮城縣史蹟名勝天然記念物』2 国書刊行会)
- 宮田 登 1969 「金華山信仰とミロク」『陸前北部の民俗』吉川弘文館、261-274頁
- 著者・年次不明 『奥州金華山畧縁起』